

現在、名古屋市中では、名古屋城の木造天守復元計画が打ち出され、東京オリンピックに向けて観光客の増加をねらった城をめぐる取組みが議論されている。また、江戸城や小田原城などのように、NPO法人が中心となって木造天守の復元が期待されている城もある。城の見方はいろいろあるが、ここでは「木材利用」という視点から城の歴史をさかのぼってみたい。

周知のように、城下町は戦国時代から徳川初期にかけて日本各地に建設された。城下町の建設には大量

名古屋城天守

ラは未発達であったために木材の供給可能地域は限定され、代替財の利用も難しかった。家康は、江戸城、名古屋城、駿府城などの建設のために全国から木材を集めるとともに、木曾や吉野などの森林を支配下におき、木材を惜しみなく消費した。城下町の建設は、森林を急速に消失させたのである。

こうして建設された城は、幕末には約200存在したが、これらは徳川幕府の崩壊とともに転機を迎えた。明治政府は、城が土族の反乱拠点となることを危惧し、1873年のいわゆる

「廢城令」の発布により城の大半を取り壊した。明治以降も、都市が木材の大量消費地であることに変わりは

は、再建を求める地域の声と観光業の活性化が重なって生じた。木造天守の再建は、安全性の観点から禁止され、各地で鉄筋コンクリート造りの天守が再建された。しかし、仮に木造が禁止されていなかったとしても、戦時・戦後の過度の森林伐採により木材供給能力が低下していた山林の状況から判断すると、国産材での

復元は困難だったであろう。「高度成長期には、天守だけでなくさまざまな建築物が鉄鋼材やコンクリート、および安価な外材を利用して建設された。

それから50〜60年が経過した現在、耐震改修が必要になったのを機に、木造復元構想が登場した。復元にむけては、資金をはじめさまざまな問題が指摘されているが、木材の確保は、戦後

木材利用の視点から歴史を知る

なかつたが、城の改修のための森林伐採はみられなくなった。

山を覆っているので、天然の大径材を除けば、徳川時代や戦後再建ブーム時と比較して難しくなさそうである。

の木材が利用され、アメリカの歴史学者コンラッド・タットマンによると、城下町の建設ラッシュで日本の森林は崩壊の危機に直面したという。

現代に比べて輸送インフ

名古屋大学大学院
経済学研究科講師

山口 明日香



やまぐち あすか 日本経済史。慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了、博士(経済学)。1979年生まれ。

その後、陸軍施設としての利用を目的に廢城指定されなかつた名古屋城や、廢城指定をうけながら一部が残った犬山城、丸岡城、松本城などは各地域で保存され、1929年施行の「国宝保存法」に基づき「国宝」に指定された。この時存在していた天守は20を数えたが、このうち名古屋城天守を含む八つが戦時中に焼失した。

国産材を利用して名古屋城の天守が復元されれば、本物に近い天守の姿を目にすることができると。しかし、鉄筋コンクリート造りの天守からも、その建設理由や経緯を問うことで、城の変遷だけでなく、建築技術や木材利用の歴史を知ることができる。

戦後の天守再建ブーム

いずれの天守も、過去から現在の時間の流れの中にもどる位置づけられるかを理解して見ると、楽しめるに違いない。

